

## 他人の息が嫌いだ

㊦ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

前回のブログで「アメ細工が町から消えた」ということを書いた。ところが、テレビ朝日の深夜番組にさっそくこのアメ細工が出てきたのである（10月30日）。神社の境内のような場所だったし、そこに屋台が映っていたから、やはり縁日の出店なのであろう。

今も町の縁日で普通に見られるものなのか、それとも地方の特殊な光景なのか分からないが、最初に「芸術クッキー」と称して映されたものは、うるち米の粉を用いた「しんこ細工」であって、アメ細工とは少し異なっていたと思う。

次に「あめ風船」と称して映されたものが、本来のアメ細工ということになるが、出演者たちの膨らませ競争に移ってしまい、細かいことは画面では分からなかった。ただ、昔の竹筒が、今では白いプラスチックの筒に代わっていることが目に付いたぐらいである。

いずれにせよ、これらは、食べ物としてのアメや米粉を工芸材料やオモチャにしているわけで、食品販売の本来の目的からは逸脱していると言えよう。食品は、単なる物品としての商品ではなくて、何よりも清潔・不潔、衛生・不衛生が問題となる「食べ物」である。そのことを忘れてしまうと、食品販売は成り立たない。

このことは、今日の食品会社が直面している問題でもあって、自分たちの扱っているものが何よりも「食べ物」であることを忘れてしまった企業は、いずれも苦境に陥っているのが現状である。

アメ細工の屋台のオジサンも、アメが何よりも「食べ物」であることを考えず、それを造るところをお客に見せようというパフォーマンスの材料にしてしまったことに誤りがあった。

私も、仲間の子供たちも、屋台のオジサンが汚い指でアメを捏ねているのを見て、そんなもの自分たちの口に入れられるかと思ったのであるが、それにもまして不潔だと思ったのは別のことだった。それは、オジサンが、アメの付いた竹筒の一方をくわえて、アメの中に息を吹き込んでいることだった。

そのアメ細工を買えば、当然、オジサンの口と接触して、ツバも付いたに違いない竹筒の部分を持たされることになる。そして、飾っておくだけならよいが、そのアメを食べれば、オジサンの息をアメと一緒に吸い込むことになる。

しかし、私たちはなぜ他人のツバや他人の息に不快を感じるのだろうか。本人にとっては、それらは不潔でも何でもない。もちろん、唾液には雑菌が含まれているだろうし、呼気にも何らかの細菌が含まれているということはある。しかし、その可能性は誰にでも同等に考えられることであって、他人のものが特にキタナイということにはならない。

この意識が逆転することがある。他人よりも自分のものが不快に感じられるという症候群だ。そ

の典型的な例が、自分の口臭を異常に気にする人に見られる。こういう人は、自分の中に、自己と他者の二極を作ってしまう、自分では何でもないものを、自分の中の他者が持つ不快なものとして、他人に代わって意識してしまうのだ。

こういう意識の二重構造に打ち勝てば、口臭神経症は大いに改善されるであろう。口臭を過度に気にしないようにするためには、或る種の意識改革が必要なのだ。このことについては、別の機会に書くことにしよう。

ここでもう一つ、私は、ウェブ検索をして色々なサイトを見ているうちに、他人のものを異常に愛する特別な人たちのいることも知った。こういう人たちを一方の極端とするならば、もう一方の極端には、少しでも他者との接触があると不快を感じる人々が来るであろう。

しかし、他人のもの、とりわけ他人の息を気にしだしたら、都市での生活はできないであろう。電車やバスの中は、みんなが吐いたり吸ったりする空気の共同使用の場に他ならない。そのことが気になって、電車やバスに乗れないという神経症的な人もいるくらいだ。

そんなことはあまり意識せず、不特定多数との空気の共同使用には平気な人でも、特定な個人、例えばテキ屋のオジサンが息を吹き込んだアメ細工はゴメンだということもある。むしろ、こういう人が一般的であろう。私も、仲間の子供たちも、ふだん清潔などということには無関心だったにもかかわらず、そう感じたのである。

不特定多数のものは良いが——少なくとも我慢はできるが——、特定単数のものは悪い。こういう曖昧な感覚が一般的なのだとしたら、食品にかぎらず、そもそも私たちが生活するうえで、何を清潔と言っているのか、何を不潔と言っているのか、もう一度よく考えてみる必要があると言えよう。

「商売は、清潔で勝って不潔で負ける」というブログを書いたことがある。実は、ここでいう清潔とは何か、不潔とは何かということをもっと正確に意味づける必要があったのである。

それを知ることが、自己と他者という人間関係の謎を解く哲学的な探求にまで発展することは言うまでもないが、実践的に見ても、政治や経済のあらゆる企ての、成功の秘訣になるのではないだろうか。

[2007/10/31 magmag]